チャイコフスキー・コンクール
史上初の女性優勝者

上原彩子の新境地

Mozart × Mussorgsky

澄みきった響きモーツァルト

2002年、チャイコフスキー・コンクール史上初の女性優勝者となった上原彩子。その衝撃から12年のときを経て、押しも押されもせぬ名ピアニストへと成長した上原彩子が、所沢ミューズでの初リサイタルで取り上げるのがモーツァルトとムソルグスキーという２つの「M」だ。

そして同じ「M」でも、まったく対照的な音楽性を持つふたりの作曲家の作品を並べるあたりに上原彩子の懐の深さ、そして音楽家としての自信を見てとることができるだろう。

モーツァルトの音楽、とりわけピアノ・ソナタは伝統的なソナタ形式の中にシンプルなフレーズが書き連ねられており、15番のソナタなど子供でも弾けるほど平易なものが多い。それもそのはず、ピアノ・ソナタの多くが貴族の令嬢など愛好家のために作曲されており、協奏曲などと違って高度なテクニックがなくても演奏できるように書かれているのだ。しかし、このシンプルな音符を音楽的感動をもって響かせるのは容易ではない。リストやラフマニノフなどを得意にする腕自慢のピアニストがモーツァルトを演奏すると途端に退屈な演奏しかできなくなるというのはピアノ・リサイタルでときに目にする光景だ。

ロシアの野人ムソルグスキー

一方で、もうひとりの「M」ムソルグスキーは伝統とか形式などという言葉とは全く無縁。絵具をそのままキャンバスにぶちまけたような洗練されない原色的な響きが支配する。有り余るほどの音楽的発想を持ちながらも、それをまとめる力には乏しかったムソルグスキーの傑作『展覧会の絵』には、数々の魅惑的な旋律と友人の死を弔う暗い情念がぐるぐると渦巻いている。当然ピアニストには個性の強い楽想の性格を理解したうえで、それを描き分ける豊かな表現力と高度なテクニック、力強いタッチ（打鍵）が求められる。

ピアニストに全く異なる音楽的資質を要求するふたりの「M」。近年ますます円熟味を増す上原彩子が、二人の作曲家の個性をどのように表現しアークホールに響かせるのか。コンクール優勝後も輝き続ける稀代のヴィルトゥオーゾ・ピアニストの“いま”をお聴きいただきたい。